

СОДЕРЖАНИЕ

**Статьи**

<i>Ю. Маруяма.</i> Употребление славянизмов в памятниках Московской Руси (распределение форм двойственного числа в «Житии Стефана Пермского» и «Житии Сергия Радонежского») .....	1
<i>Н. Яги.</i> Неписьменные аспекты литературных произведений в литературоведческой мысли Б. Эйхенбаума .....	9
<i>А. Хонда.</i> У руин стеклянных башен: возвращение стеклянных зданий в художественном движении «Бумажная архитектура» .....	17
<i>Г. Косино.</i> Образ народа и Федор Ростопчин во время Отечественной войны 1812 года .....	28
<i>Н. Дои.</i> О влиянии теории Эйзенштейна на «Сказку сказок» Норштейна .....	38
<i>Ю. Сугино.</i> О теме апокалипсиса в «Медном всаднике» А. С. Пушкина .....	46
<i>М. Ояма.</i> Русская интеллигенция в «эпоху безвременья»: литературная критика произведений В. М. Гаршина до и после убийства Александра II .....	54
<i>Э. Сакаи.</i> Интертекстуальная практика Кушнера: Блок и персона поэта .....	62
<i>М. Омори.</i> Михаил Булгаков и журналы советской антирелигиозной пропаганды 1920-х гг. ....	73
<i>С. Акикуса.</i> До и после Холокоста: дважды переведенный рассказ В. В. Набокова .....	82
<i>С. Такаянаги.</i> Представление о «болезни» в первой трилогии Марины Палей .....	90
<b>Рецензии</b> .....	97

- *Р. Хаясида.* Вопросы русской аспектологии (Ф. Хаттори) ● *Х. Кано.* Русско-японский словарь растений: их названия, символика и поэтический образ (С. Курихара) ● *М. Коно.* Русский эстетический «консерватор-реакционер» (Ф. Осука) ●
- А. Саканива.* Фёдор Тютчев: «Самосознание» России 19 века (С. Мидсу) ● *М. Судзуки.* В поисках слова, которого нет. Окно в современную русскую поэзию (А. Такэда) ● *К. Савада.* Белоэмигранты и японская культура (Т. Минамото) ● *К. Ю. Лаппо-Данилевский.* Чувство прекрасного. Влияние И. И. Винкельмана на литературу и эстетическую мысль в России (Ю. Торияма)

**Отчеты специальных программ на Конференции ЯАР 2007 года:**

Художественное творчество для выживания: современное русское искусство (В. Коно) .....	117
<b>Премия ЯАР за лучшие работы 2008 года</b> .....	120
<b>Хроника</b> .....	121

Памяти профессора Минору Нитта (Д. Сато); Памяти профессора Юкио Кудо (Т. Мидзуно); Памяти профессора Сэйитиро Кудо (М. Ватанабэ)

# Bulletin of the Japan Association for the Study of Russian Language and Literature

No.40

2008

## CONTENTS

### Articles

- Y. Maruyama. The Usage of Slavonicism in Russian Texts of the Early Period of Muscovy: On the Distribution of Dual Form in *The Life of St. Stephen of Perm'* and *The Life of St. Sergius of Radonezh* ..... 1
- N. Yagi. Non-writing Aspects of Literary Works in the Literary Theory of B. Eikhenbaum ..... 9
- A. Honda. By the Ruins of Glass Towers: The Return of Glass Buildings  
in the Movement of Paper Architecture ..... 17
- G. Koshino. The Image of Narod and Fedor Rostopchin in the Napoleonic War ..... 28
- N. Doi. On the Influence of the Theory of Eisenstein in Norstein's *Tale of Tales* ..... 38
- Y. Sugino. On the Theme of the Apocalypse in A. S. Pushkin's *The Bronze Horseman* ..... 46
- M. Ohyama. Russian Intelligentsia at *Epokha bezvremen'ya*: Literary Criticism  
of Vsevolod Garshin before and after the Assassination of Alexander II ..... 54
- E. Sakai. Kushner's Intertextual Practice: Blok and the Poet's Persona ..... 62
- M. Omori. Mikhail Bulgakov and the Soviet Journals of Antireligious Propaganda in the 1920s ..... 73
- S. Akikusa. Before or After the Holocaust: A Twice-translated Story,  
Vladimir Nabokov's "Breaking the News" ..... 82
- S. Takayanagi. On the Representation of Disease in Palei's Early Short Stories ..... 90
- Reviews** ..... 97

- R. Hayashida, *Verbal Aspect in Russian* (F. Hattori) ● H. Kano, *Russian Dictionary of Plant Names and their Symbols and Literary Imagery for Japanese* (S. Kurihara) ● M. Kono, *Russian Aesthetic "Conservative- Reactionary"* (F. Osuka) ● Fyodor Tyutchev, "Self-consciousness' of 19th Century Russia" (S. Miyoshi) ● M. Suzuki, *In Quest of the Nonexistent Word: A Window on Contemporary Russian Poetry* (A. Takeda) ● K. Sawada, *White Russian Emigrés and Japanese Culture* (T. Minamoto) ● K. Iu. Lappo-Danilevskii, *A Sense of the Beautiful. J. J. Winckelmann's Influence on Literature and Aesthetic Thought in Russia* (Y. Toriyama)

### Reports of Special Programs at the Annual Assembly of JASRLL 2007:

Art for Survival: Contemporary Russian Fine Art (W. Kono) .....117

**JASRLL 2008 Outstanding Research Award** .....120

**Chronicle** .....121

To the Memory of Professor Minoru Nitta (J. Sato); To the Memory of Professor Yukio Kudo (T. Mizuno); To the Memory of Professor Seiichiro Kudo (M. Watanabe)

**K. Ju. Lappo-Danilevskij, *Gefühl für das Schöne. Johann Joachim Winckelmanns Einfluss auf Literatur und ästhetisches Denken in Russland.***

Köln; Weimar; Wien: Böhlau, 2007. XIV, 476 S.

鳥山祐介

2007年に刊行されたラッポ＝ダニレフスキーの研究書『美の感覚：ロシアの文学及び美学思想におけるヴィンケルマンの影響』は、18世紀ドイツの考古学者・美術史家ヴィンケルマン（1717-1768）が18世紀後半から19世紀半ばにかけてのロシア文学、美学思想に与えた影響を、膨大な一次資料を駆使して浮き彫りにした大著である。

ヨーロッパ文化史に古代ギリシア・ローマの文化遺産がもたらした意義を過小評価することはできない。ルネサンス期から現代に至るヨーロッパの多くの知識人が、古典古代という鏡を用いつつ自らのアイデンティティを築き上げてきたという事実にも異を唱えるのも難しい。とはいえ、古典古代へのアプローチが常に一定の様相を呈していたわけではない点には、注意が必要である。

ヴィンケルマンの存在は、近代ヨーロッパのそうした古典受容の問題を考える上で一つの鍵となる。『ギリシア芸術模倣論』（1755）や『古代美術史』（1764）といった著作で知られる彼は、古代ギリシアの彫刻を「理想美」の体現として礼賛し、現代の芸術家が模倣すべき対象とした。彼の理念は、当時汎ヨーロッパ的な規範として君臨していた旧体制フランスの文化潮流である古典主義のアンチテーゼとしての機能も担われ、後にゲーテやスタール夫人の紹介も与って美術の領域を超えた影響力を有するようになった。「理想美」「古代彫刻の普遍性」「身体や観念への気候の影響」「地中海人の身体の生来の美しさ」「古代美術の時代区分」「ラファエロ礼賛」「芸術を生み出す条件としての政治的自由」「ベルヴェデーレのアポロンの描写など彫刻作品のエクフラシス」など、彼の著作に現れた諸要素・諸概念がヨーロッパの文学や思想に受け継がれていったのである。

古典古代文化は、ロシアでも早くから大きな影響力を持った。そして、正教や独自の政治文化を背景にしたその受容の様相は、西欧のケースに劣らず複雑なものであった。従って、ヴィンケルマンの思想が18世紀以降のロシアでどう受け入れられたかという問題は、

ロシア文化研究に刺激的な視点を提供するはずである。ところが、ロシア文学や思想の領域におけるヴィンケルマンの影響に関しては、包括的な研究がこれまでなされてこなかった。18世紀ロシアの美学思想に関する古典的な研究として筆頭に挙がるクラコーワの『18世紀ロシアの美学思想史概説』や、続いてよく知られるワリツカヤの『18世紀ロシアの美学』でもヴィンケルマンに大きな関心は払われない。<sup>1</sup> 2000年に出版されたクナーベの『ロシアの古典古代』でも同様である。<sup>2</sup>

こうした状況を考えれば、本稿で紹介するラッポ＝ダニレフスキーの著書は、まさに長らく待ち望まれていた画期的研究といえることができる。著者が述べる通り、ロシアにおけるヴィンケルマン受容に関わる資料を初めて学術的に掘り起こすことに本書の主目的はあるといえるが（P.386）、何よりその収集されたデータの量に本書の大きな価値があることは間違いないだろう。

ここで取り扱われる18世紀後半から19世紀半ばは、ヴィンケルマンの著作が、同時代の芸術や美学理論の動向と常に結びついており、アクチュアルな関心の対象であった時期である。この点で、ヴィンケルマンが学術研究の対象、人文教育の一部たる文化遺産として位置づけられていく後の時代とは区別される。

検討対象となるテキストは広範にわたっており、デルジャーヴィン、カラムジン、バーチュシコフ、グネーディチ、デリヴィク、プーシキン、シェヴィリョフ、ゲルツェン、ゴンチャロフ、アポロン・マイコフ、シチェルビーナ、フェートなどの作品のほか、美学を題材とする多くの理論書、論稿が含まれている。

インデックスとしての機能を備えた本書は網羅的な要約が困難なので、以下では文学研究にも関連が深い箇所を中心に、いくつかの論点を抜粋してみたい。

なお、評者は、本書のロシア語訳原稿を著者より譲り受けているが、評者のドイツ語読解力はこの大著を短期間に読了するには十分でないため、本稿を執筆するに当たってはこの翻訳に大きく依存したことを断っておく。このロシア語版は、2010年の刊行が予定されており、刊行の際にいくつかの補説が付け加えられる可能性があるとのことだが（ヴァチェスラフ・イワノフの後期の論稿に関する補説などが加わる予定であるという）、それを除けばドイツ語版と全く構成を同じくするものである。細かな表現上の違いは評者が確認した限りでも時折見られるが、本稿の内容に直接関わる範囲で大きな相違点はない。

本書は、前文と序論、22の章より構成される本論、及び結論より成る。

第1-4章で詳述されるのは、ロシア人がヴィンケルマンの著作に徐々に接し始める1750-90年代の状況である。この段階では特に、1757年に創設された芸術アカデミーと、西欧への旅行者の存在が注目される。

例えば芸術アカデミーの初代総裁イワン・シュワロフは、イタリアで入手した彫像の型をアカデミーに多数寄贈した。この際に彼が選択した彫像作品のリストは、ヴィンケルマンの著作に大きく影響されており、結果的にヴィンケルマンの価値観をアカデミーの教育カリキュラムに反映させることとなった (P.63)。18世紀末以降、ヴィンケルマンの普及に寄与した者の多くがアカデミーの教員であったことを考えるとき、この事実は重要である。

この頃西欧に旅行して当地の文化人と交流した貴族たちの手紙や著作にも、ヴィンケルマンの理念が浸透している。詩人、建築家、造園家として知られるニコライ・リヴォフの『イタリア日記』(1781)はその代表例であり、ベルヴェデーレのアポロンの描写や古代芸術史の時代区分、18世紀ドイツの画家A.R.メンクスへの高い評価、ルーベンスへの否定的な評価など、ヴィンケルマンの見解と重なる記述が多く見られる。

第4章では、このリヴォフを中心とするいわゆる「リヴォフ・サークル」のメンバーであったデルジャーヴィンの詩『芸術の愛好家に』(1791)が分析され、この作品がヴィンケルマンの理念やそのエクフラシスの技法と関連付けられるという斬新な見解が提示される。その際、デルジャーヴィンと造形芸術の関係を論じたダニコの古典的な論文で示された、この詩が「専ら詩人の視覚印象をもとに書かれた」という理解には、修正が加えられる (P.93)。

ヴィンケルマンの著作がロシア語で多数刊行された1791-1825年は、ロシアでこの人物への関心が最も高まった時期である。

第10章では、ロシア文学における「アンピール様式」発祥の場ともされるオレーニン・サークルに焦点が当てられる。中でもヴィンケルマンの影響が顕著なのが、スタール夫人を通して彼の著作を知ったとされるバーチュシコフである。例えば、彼の散文作品『芸術アカデミーの散歩』(1814)では、語り手がヴィンケルマンの愛読者と設定され、ベルヴェデーレのアポロンの描写がクライマックスに据えられる。この作品はまた、エクフラシスの技法が駆使される「展覧会散策記」という新しいジャンルをロシア文学にもたらしただという点でも、ヴィンケルマンと結びつく。バー

チュシコフの詩が、ベリンスキー等によりしばしば「視覚的」「彫刻的」と形容されたのも、偶然ではないだろう。

第11章で扱われるグネーディチもオレーニン・サークルのメンバーであり、ヴィンケルマンの信奉者である。『イリアス』の翻訳者として知られる彼が、ロシア文学の発展のために、古典古代の遺産の研究と並んで「ドイツに倣いフランスの影響を克服すること」を重視したことは興味深い。この見解は、フランス流の古典主義に対するアンチテーゼとしての側面を持ったヴィンケルマンの古典理解につながるからである。また、彼が牧歌『漁師たち』(1822)の中で描いたのは、野卑な性格を払拭された調和的な古代的形象としての漁師だが、こうした「理想化」の処理もヴィンケルマンの理念に重なるものといえる (P.200-202)。

時代は少し下るが、モスクワ大在学中にヴィンケルマンを知ったとされるゴンチャロフを論じた第19章は、文学研究という観点からとりわけ興味深い。例えば、『オブローモフ』(1859)の第二篇第五章に現れるオリガの容姿の描写は、ヴィンケルマン的な「優美と調和」のモチーフで貫かれ、「彫刻性」に結びつく表現が頻出する (P.341-342)。また、同じ章の草稿では、オブローモフがシュトルツへ宛てた手紙の中の、オリガへの愛を訴えた箇所にヴィンケルマンへの言及が現れる。このことは、オブローモフが、オリガの容貌を古代彫刻というプリズムを通して眺めていることと符合しているという (P.342)。また『断崖』(1869)でも、ヴィンケルマンの名こそ現れないが、彫刻に結び付けられたソフィアの容貌、かつて芸術アカデミーに通ったライスキーによる「美への賛歌」など、ヴィンケルマンの影響と見られる要素は多い (P.343-345)。先行研究に倣いつつ、シュトルツやトゥーシンの中に「完璧なる個人としてのギリシア人」というヴィンケルマン的な形象を見ることも可能である (P.346)。

さらに、第20章で論じられるように、ヴィンケルマンの影響は「純粹芸術」派の詩人達にも強く及んでいる。詩集『ローマ紀行』(1847)でヴァチカンの古代彫刻を描いたアポロン・マイコフがその代表格だが、彼らによる抽象的な「永遠の美」の称揚、古典芸術への関心などは、ヴィンケルマン美学と親和的である。また、詩人ニコライ・シチュルビーナも、理想化された古代ギリシアをしばしば同時代のロシアに対置したことや、パロディーが作られるほど有名になった詩『手紙』(1847)の中の一節「美、美、美！」に顕著なように、この派のヴィンケルマンへの傾倒を象徴する

存在である (P.345)。

本書の主題の枠外にある 19 世紀後半以降の事例に関しては「結語」部分で示唆されるだけだが、刺激的な問題を孕むものが多い。例えば、著者によればドストエフスキー『白痴』の中の有名な言葉「美は世界を救う」は、シラーと並んでヴィンケルマンの美学、とりわけ神性を帯びた至高の存在としての美という概念を背景に想定する必要があるという (P.396)。また、革命後のソ連で生じたドイツの古典や新人文主義への関心とヴィンケルマンとの関係といった問題も非常に興味深く、さらなる考察が望まれよう (P.400-401)。

繰り返しになるが、ヴィンケルマンとロシアの文学・思想との接点を示す資料を、時期を限定しつつ網羅的に提示しているところに、本書の最大の意義がある。一方、物足りなく思われる点を挙げるとすれば、ヴィンケルマンに直接関連する多くの情報がカバーされる一方で、「ヴィンケルマンと深く関連しつつ、一般性も有する問題」に関して、踏み込んだ考察があまりなされないことであろう。例えば、本書で三つの章が割かれたシェヴィリョフや、ウヴァーロフといった人物はいずれもヴィンケルマンの影響を受けたが、彼らの保守思想とギリシア趣味との関連といった、多くの読者が関心を持つと思われる近代ロシア文化史上の問題は、ここでは深く掘り下げられていない。全体として、本書では一般的な問題の側からアプローチがなされることが少ないので、ヴィンケルマンに直接関心を持たない読者が通読する際、所により忍耐を強いられる可能性は否定できない。

とはいえ、予め考察対象として定めたテーマや時代の枠組みをはみ出しかねない大きな問題に安易に踏み

込まないことは、裏を返せば本書の学問的な精緻さと誠実な姿勢の反映でもある。むしろ、本書中で直接考察されないロシア文化史上の問題を考えるための貴重な材料をも多く提供するという点において、本書が備える豊かな潜在力を評価すべきであろう。資料の収集・体系化という地味な作業に支えられ、膨大な情報量を誇る本書が、既にロシア文化研究のかけがえのない一部であることは疑いない。

本書の著者コンスタンチン・ユーリエヴィチ・ラッポ=ダニレフスキーは、1962年にレニングラードで生まれている。現在、ロシア科学アカデミーロシア文学研究所(プーシキンスキー・ドーム)、18世紀部門の研究員であり、既に100本以上の論文を発表している。主として比較文学・比較文化的視点からロシア文化に関する研究を行っており、単行本としては本書のほか、二冊のリヴォフ著作集の刊行への寄与が注目される。<sup>3</sup>

(とりやま ゆうすけ、千葉大学)

#### 注

- <sup>1</sup> Кулакова Л. И. Очерки истории русской эстетической мысли XVIII века. Л.: Изд. «Просвещение», 1968; Валицкая А. И. Русская эстетика XVIII века. М.: Искусство, 1983.
- <sup>2</sup> Кнабе Г. С. Русская античность. М.: РГГУ, 2000.
- <sup>3</sup> N. A. L'vov, *Italienisches Tagebuch: Ital'janskij dnevnik* (Köln; Weimar; Wien: Böhlau, 1998); Львов Н. А. Избранные сочинения. Кёльн; Веймар; Вена: Бёлау; СПб.: Пушкинский Дом, РХГИ, Акрополь, 1994. これらの文献はウェブ上で閲覧することが出来る。http://www.rvb.ru/18vek/lvov/